

## 『資治通鑑』劄記(二)

福島 正

大阪教育大学教養学科社会文化講座

(一九九七年三月三十一日 受付)

此所謂助桀所虐。且忠言逆耳利於行、毒藥苦口利於病。願沛公聽樊噲言。沛公乃還軍霸上。(九／二九八)

本稿は「大阪教育大学紀要」第I部門、第四十五巻、第二号に発表した「『資治通鑑』劄記(一)」に続く報告であり、目的や方法などは前稿と同じである。今回取り上げた範囲は「資治通鑑」巻九より巻二十二までで、時期で言えば前漢の高祖期より武帝期に当たる。底本には標点本「資治通鑑」(北京中華書局、一九七六)を用いた。括弧内の数字はその巻数と頁数で、たとえば(九／二九八)は巻九、二九八頁を示す。

キーワード 中国史学史、司馬光、「資治通鑑」

### 十一

沛公見秦宮室・帷帳・狗馬・重寶・婦女以千數、意欲留居之。樊噲諫曰、沛公欲有天下耶、將爲富家翁耶。凡此奢麗之物、皆秦所以亡也。沛公何用焉。願急還霸上、無留宮中。沛公不聽。張良曰、秦爲無道、故沛公得至此。夫爲天下除殘賊、宜縞素爲資。今始入秦、即安其樂、

漢紀一、高帝元年(前二〇六)の記事。秦都咸陽に入城し、そこに居座ろうとした劉邦が、樊噲と張良に諫められて霸上に引き返したという、おなじみの話である。この史料の出典は「史記」留侯世家および「漢書」張良伝だが、たとえば留侯世家には、沛公入秦宮、宮室・帷帳・狗馬・重寶・婦女以千數、意欲留居之。樊噲諫沛公出舍。沛公不聽。良曰、夫秦爲無道……とあるだけで、樊噲の諫言の具体的な内容は記録されておらず、高祖本紀や樊噲列伝にもそれは見えない。ことは「漢書」の諸篇においても同様である。そのため「資治通鑑證補」は「曰以下、史・漢の紀傳に無し」と言い、この部分の出典を明示していない。しかし、これは石川安貞の失検で、樊噲の諫言は右の留侯世家に付けられた裴駰「史記集解」に次のように記されている。

徐廣曰、一本、噲諫曰、沛公欲有天下邪、將欲爲富家翁邪。沛公曰、吾欲有天下。噲曰、今臣從入秦宮、所觀宮室・帷帳・珠玉・重寶・鐘鼓之飾、奇物不可勝極。入其後宮、美人・婦女以千數。此皆秦所以亡天下也。願沛公急還霸上、無留宮中。沛公不聽。

劉宋の徐廣が見た「一本」、つまり『史記』の異本が、北宋のころまで伝わっていたとは考えられないから、司馬光は『史記集解』を要略して『資治通鑑』の記事を作成したのに違いない。そして、司馬光がわざわざそれを引いたのは、樊噲の意見に賛同するところがあつたためであろう。逐一例は挙げないが、「節用」は司馬光の生活信条であるとともに財政論の柱であり、王安石の経済政策を批判するときに決まつて切り出す手札でもあつた。君主の奢侈は節用に背く最たるもので、それを諫めた樊噲の発言は、いわば司馬光好みの話柄だつたのである。もつとも、この手札は王安石には全く通用しなかつたが、それはともあれ、史書の正文のみならず、注釈にまで史料を求めようとした司馬光の努力が、結果として樊噲の嘉言を後世に伝え、ひいては『資治通鑑』を内容豊かなものになっていることは評価しておきたいと思う。

- (1) 前稿と同じく、『史記』の底本には『史記會注考證』本を用いた。また、『漢書』の底本には『漢書補注』本を用いた。
- (2) 「曰以下」の「曰」とは、『樊噲諫曰』のそれである。
- (3) 司馬光の節用の主張については、宋衍審『司馬光傳』第三章、第六節「勸儉戒奢」（北京出版社、一九九〇）、稲葉一郎「司馬光の政治思想」第四章「財政論」（関西学院大学東洋史学研究室編『アジアの文化と社会』所収、法律文化社、一九九五）などに詳しい。
- (4) 胡三省はこの諫言を樊噲の第一の功績に挙げ、鴻門の会での活躍の上に置いている。また梁玉繩『史記志疑』卷二十六や張文虎『舒藝室隨筆』卷四は、これを『史記』の正文に書き入れるべきだと言っている。

(5) 『資治通鑑』が史注を活用していることは、後漢末から魏にかけての諸巻に『三國志』裴松之注を頻繁に引くところに顕著だが、本稿で扱った範囲にもいくつかの事例が見いだせるので、その一部を紹介しておきたい。

イ、「淮南王之謀反也、膠東康王寄微聞其事、私作戰守備。及吏治淮南事、辭出之。（寄母王夫人、即皇太后之女弟也）。於上最親、意自傷、發病而死、不敢置後」（十九／六三五）

ロ、「春、起柏梁臺。（作承露盤、高二十丈、大七圍、以銅爲之。上有仙人掌、以承露、和玉屑飲之。）（二十／六五五）

ハ、「而發天下（吏有罪者、亡命者及贅壻、賈人、故有市籍、父母大父母有市籍者）、凡七科、適爲兵」（二十一／七〇五）

イは『漢書』景十三王伝に顔師古『漢書注』を、ロは『史記』孝武本紀に司馬貞『史記索隱』を、ハは『史記』大宛列伝に張守節『史記正義』をそれぞれ組み込んだもので、いずれも括弧内の記事が史注に基づいている。他に、史書の難しい文字を史注の訓詁に従ってわかりやすい文字に改めている箇所も多い。こうした細やかな作業が、『資治通鑑』を内容豊かで読みやすいものになっている一因なのである。

## 十二

田榮弟橫收散卒、得數萬人、起城陽。夏、四月、立榮子廣爲齊王、以拒楚。項王因留、連戰、未能下。（九／三一七）

漢紀一、高帝二年（前二〇五）の記事。齊で自立した田榮が項羽に敗れて死んだのち、弟の田橫が敗殘兵を集めて再度挙兵したことを記した一段である。この史料の出典は「夏、四月」以下の一文が『史記』高祖本紀および『漢書』高帝紀、それをさむ前後が『史記』項羽本紀および『漢書』項籍伝だが、たとえば項羽本紀は、この事件を次のように記している。

於是田榮弟田橫收齊亡卒、得數萬人、反城陽。項王因留、連戰、未能下。

両者を比較して気付かれることは、『史記』が田橫の挙兵を「反」と表現したのに対し、『資治通鑑』はそれを「起」と書き改めていることである。田榮・田橫兄弟は、項羽が田都を齊王に封じたことに不満を抱き、田都を追放して齊で自立した。項羽からすれば、彼らは反乱分子以外の何者でもない。司馬遷は項羽の側に立つて項羽本紀を記述したので、そのため田橫の挙兵を「反」と表現したのである。それは、この項羽本紀という限られた世界の中では、当然の処置であつた。<sup>1)</sup>しかし、巨視的に見れば、当時は他にも劉邦や陳餘など自立を企てる者が多くおり、項羽の権力が確立していたとは言えない。田橫の挙兵はこうした権力の空白期に発生した出来事であり、それを項羽との関係に於いてのみ把握して「反」と規定するのは、歴史の大局を見誤ることになりかねない。司馬光はそう考えて、中立的で客観的な「起」という表現に改めたのだと思われる。これは小さな事柄だが、司馬光が客観的な歴史叙述を志向したことを示す一例にはなるだろう。<sup>2)</sup>

(1) ちなみに『漢書』項籍伝でも、田橫の挙兵は「反」と表現されている。司馬遷とは違い、班固は一貫して漢王朝の側に立つて歴史を叙述すればよく、実際、そうしたつもりであつたろう。だとすれば、ここは『史記』を安易に踏襲したとの謗りを免れまい。しかも、田橫の挙兵は項羽の目を劉邦から逸らせて結果的に漢を利したわけだから、その意味でも班固が「反」としたのは誤っている。

(2) ここで取り上げたのは王朝草創期の問題だが、衰亡期に発生する戦乱に対しても、それを「反」と表現することは是非が同じように問題となる。これについては劉知幾『史通』曲筆篇に適切な指摘があるが、『資治通鑑』との対比も含めて、拙稿『史通』と『資治通鑑』（『中國思想史研究』第十八号、一九九五）で触れたことがあるので、こ

では言及しない。

### 十三

上曰、吾聞、進賢受上賞。蕭何功雖高、得鄂君乃益明。於是因鄂千秋所食邑、封爲安平侯。是日、悉封何父子兄弟十餘人、皆有食邑。益封何二千戶。

(十一／三七二)

漢紀三、高帝六年（前二〇二）の記事。漢の天下統一後に行なわれた元勲の功績順位を定める御前会議において、群臣はみな曹參を第一位に推したが、鄂千秋だけは蕭何を推した。高祖は鄂千秋の意見を採用し、彼を安平侯に封じるとともに、蕭何にも二千戸の領民を増増した。右はその経緯を記した一段の末尾である。これを読むかぎりでは、功績第一と認められたことが蕭何への加増の理由のように見えるが、実はそうではない。そのことは、もとの史料である『史記』蕭相国世家および『漢書』蕭何伝には、「益封何二千戸」に続けて、次のような高祖自身のことが載せられているところからわかる。

以嘗絲威陽時、何送我獨贏錢二也。<sup>1)</sup>

高祖がまだ泗水の亭長であつたころ、咸陽での労役に徴用者を送り届ける任務を帯びたことがあり、沛県の吏員はそれぞれ三百錢を餞別に贈ったが、蕭何だけは五百錢を贈った。このたびの二千戸の加増は、餘分の二百錢に対する返礼だといふのである。この発言を記しておきさえすれば、先の誤解は生じなかったものを、どうして司馬光はそれを省略してしまったのであろうか。もともと『資治通鑑』は蕭何らが餞別を贈った話を記録しておらず、それと対応させたのだと考えられなくもない。しかし、これは編年体史の常套手段である「初云々」の形式で本段に補えば解消することだから、理由にはならないだろう。

やはり、司馬光には意図するところがあつたに違いない。思うに、司馬光は、彼が仕えた四代の皇帝に対し、「用人」「賞善」「罰惡」の三者が治国の要諦であり、それが正しく遂行されるか否かで国家の安危が分かれると繰り返し進言している。いま、高祖が蕭何に行なつた加増は、私的な恩義を公的な褒賞で報いたもので、「賞善」の正しい在り方ではない。司馬光の主張からすれば、それは国家の危機を招くはずである。ところが漢王朝は、前漢だけでも二百年あまりの命脈を保つた。つまり、蕭何加増の一件は、彼の主張と矛盾するのである。司馬光は、日ごろの主張を崩しかねない事例を皇帝に示すことの重大さと、史実に誤解が生じることの重大さとを天秤に掛け、前者をより重大と考へて高祖のことは削除したのではなからうか。以上は推測ではあるが、もしもこれが当たっているとすれば、前章に見た客観性への志向とは別のレベルで、『資治通鑑』は、はなはだ主観的な書物であるとも言えるだろう。

(1) ここは『漢書』から引いた。『史記』では「以帝嘗絳咸陽時、何送我獨贏奉錢二也」となっている。この場合は、前句を地の文、後句を高祖の発言として読むことになるのだろう。

(2) 四代の皇帝とは仁宗・英宗・神宗・哲宗。司馬光はそれぞれに対し、やや表現は異なるが、同旨の進言を行なっている。その一つ、嘉祐八年（一〇六三）に英宗に奉られた「上皇帝疏」（『溫國文正司馬公文集』巻二十五、「司馬文正公傳家集」巻二十七）の一節には次のようにある。「夫爲政之要、在於用人・賞善・罰惡而已。三者之得、則遠近翕然、嚮風從化、可以不勞而成、無爲而治。三者之失、則流聞四方、莫不解體、綱紀不立、萬事蹶頓。治亂之原、安危之幾、盡在於是」。

(3) 高祖の事蹟のうち、司馬光が皇帝に示すことを憚つたのではないかと推測される事例として、他に次のものが挙げられる。高帝九年（前一九八）に未央宮で催された酒宴の席上、高祖は父の太上皇に「始大

人常以臣無賴、不能治產業、不如仲力。今某之業所就、孰與仲多」と語りかけた。この記事は『史記』高祖本紀および『漢書』高帝紀に見えるが、明の黄宗羲などは、天下の経営を一家の産業と同一視した発言だとして厳しく非難している（『明夷待訪録』原君篇）。恐らく、司馬光も黄宗羲と同じように考えたのであろう、これを『資治通鑑』に採録していない。

#### 十四

上以荆王賈無後、更以荆爲吳國。辛丑、立兄仲之子濞爲吳王、王三郡、五十三城。

（十二／四〇三）

漢紀四、高帝十二年（前一九五）の記事。劉濞を吳王に封じたことを記した一段である。もとの史料は『史記』吳王濞列伝、『漢書』高帝紀および吳王濞伝などであろうが、これらにはともに、一つの逸話が書き添えられている。いま、それを『史記』から引用しよう。

已拜受印、高帝召濞相之、謂曰、若狀有反相。心獨悔、業已拜、因拊其背、告曰、漢後五十年、東南有亂者、豈若邪。然天下同姓爲一家也。慎無反。濞頓首曰、不敢。

言うまでもなく、劉濞は景帝の前三年（前一五四）に勃発した呉楚七国の乱の首謀者だが、高祖はその危険を觀相術によって封建当初から見抜いていたというのである。司馬光はこの話を『資治通鑑』に採録していない。そして、それが彼の觀相術を否定する考えに則った処置であることは疑いない。

司馬光が觀相術・占夢術・占卜などに基づく予言記事を排除していることは前稿でも取り上げたが、本稿で扱う範囲にもいくつかの事例が見いだせる。劉濞の話を引きいたついでに、それらをまとめて紹介し

よう。たとえば『史記』外戚世家および『漢書』外戚伝には、文帝の竇皇后の弟の竇廣國、字は少君という人物についての、次のような話が記されている。

年四五歳時、家貧、爲人所略賣。其家不知處。傳十餘家、至宜陽、爲其主人入山作炭。暮臥岸下百餘人、岸崩、盡壓殺臥者、少君獨脫不死。自卜數日當爲侯。從其家之長安、聞皇后新立、家在觀津、姓竇氏。廣國去時、雖少識其縣名及姓、又嘗與其姊採桑墮、用爲符信、上書自陳。皇后言帝、召見問之、具言其故、果是。

崖崩れから一人助かった竇廣國が自分で占つてみたところ、やがて侯爵となる前兆だと出たというのである。実際、彼は文帝の後七年（前一五七）に章武侯に封ぜられたから、この占いは当たっていたことになる。しかし、『資治通鑑』は一連の話を削略して、

有弟廣國、字少君。幼爲人所略賣、傳十餘家。聞竇后立、乃上書自陳。召見、驗問、得實。  
(十三／四四二)

と言うにすぎない。また、『史記』絳侯周勃世家および『漢書』周亞父伝には、周勃の息子である周亞夫の若いころの話として、次のような記事が載せられている。

亞夫爲河内守時、許負相之。君後三歲而侯、侯八歲爲將相、持國秉、貴重矣。於人臣無二。其後九年而餓死。

これまた実際に、周亞夫は文帝の後三年（前一六一）に條侯に封ぜられ、景帝の前三年（前一五四）に大尉となつて呉楚七国の乱を鎮圧し、前七年（前一五〇）には丞相に上つて位人臣を極めたが、後元年（前一四三）に謀反の嫌疑で投獄され、五日間の絶食ののち、吐血して死んだわけだから、許負の観相術は正しかったことになる。しかし、司馬光はこの話も『資治通鑑』に採録していない。また、『漢書』李陵伝には、李陵が匈奴に敗れたとの報告がもたらされた時の武帝の対応として、次のような話が記されている。

上欲陵死戰、召陵母及婦、使相者視之、無死喪色。後聞陵降、上怒甚。

しかし、『資治通鑑』は観相に関する部分を削除して、

上欲陵死戰。後聞陵降、上怒甚。

(二十一／七一六)

と言うだけなのである。さらに、予言記事ではないが、『史記』封禪書および『漢書』郊祀志に記された、文帝の前十六年（前一六四）に五帝壇を長門亭の北に建てたのは、文帝がそこで不思議な五人の人影を見たからだという話、『史記』李將軍列伝および『漢書』李廣伝に記された、李廣が石を虎と見誤つて射たという有名な逸話、『史記』大宛列伝および『漢書』張騫伝に記された、烏孫王の昆莫が鳥や狼に育てられたという話なども、『資治通鑑』では等しく削除されている。竇廣國の話はいわゆる貴種流離譚に属するものであろうし、昆莫の話は民族学の見地からは有用な史料なのかもしれないが、もちろん司馬光には、そうした視点はなかった。要は、神秘的な話か否かの判断基準で史料の採否を決定しているのである。

(1) 前稿の一・四・七を見られたい。

(2) 竇廣國と周亞夫の記事は、ともに『漢書』より引いた。なお、許負については、のちに文帝の母となつた薄姫の観相を行い、天子を生むだろうと予言した話が『史記』外戚世家および『漢書』外戚伝に見えるが、『資治通鑑』には採録されていない。また、同じ『漢書』外戚伝には、武帝が望氣者の言によつて、のちに昭帝の母となつた趙婕妤と巡り合ったとする話や、彼女が「拳夫人」と呼ばれたゆわれなどが記されているが、これも『資治通鑑』には採録されていない。

(3) とは言え、『資治通鑑』に神秘的な記事が皆無でないことは、前稿の十で述べたとおりである。本稿で扱う範囲にも、そうしたものは散見する。たとえば『史記』呂太后本紀および『漢書』五行志中之上に記された、呂太后が蒼犬のような物怪に取り付かれ、占卜の結果、それ

が趙王劉如意の祟りだとされた話や、『史記』外戚世家および『漢書』外戚伝に記された、景帝の王夫人は太陽が懷に入った夢を見て武帝を懷妊したとする話などは、それぞれ『資治通鑑』漢紀五（十三／四二九）、漢紀八（十六／五三二）に載せられているのである。なお、呂太后のことは、前稿の注に引いた清の張宗泰「胡三省謂通鑑不語怪辨」『魯巖所學集』卷一にも取り上げられている。

## 十五

諸呂欲爲亂、畏大臣絳・灌等、未敢發。朱虛侯以呂祿女爲婦、故知其謀、乃陰令人告其兄齊王、欲令發兵西、朱虛侯・東牟侯爲內應、以誅諸呂、立齊王爲帝。齊王乃與其舅駟鈞、郎中令祝午、中尉魏勃陰謀發兵。齊相召平弗聽。八月、丙午、齊王欲使人誅相。相聞之、乃發卒衛王宮。魏勃給召平曰、王欲發兵、非有漢虎符驗也。而相君圍王固善、勃請爲君將兵衛王。召平信之。勃既將兵、遂圍相府、召平自殺。

（十三／四三〇）

漢紀五、高后八年（前一八〇）の記事。呂太后の没後、朱虛侯劉章らが齊王劉襄を擁して呂氏一族の掃討に乗り出したことを記した一段の前半である。総じて『資治通鑑』の文章は澁みがないという定評があるが、ここについては、そうとも言えない。その理由は、齊王の相であった召平の呼称が、「八月、丙午」から「衛王宮」に至る部分では官職の「相」、以下は姓名の「召平」で書かれているためである。『資治通鑑』では、一つの段落では一つの呼称で揃えるのが通例であるのに、ここはどうしてそうなのだろうか。それは、もとの史料に原因がある。この一段の史料は大半が『史記』齊悼惠王世家および『漢書』高五王伝だが、たとえば齊悼惠王世家に、

齊王既聞此計、乃與其舅父駟鈞、郎中令祝午、中尉魏勃陰謀發兵。齊相召平聞之、乃發卒衛王宮。魏勃給召平曰……召平信之。

とあるように、それらは「召平」で統一されている。しかし、ここには齊王が彼を殺そうとした記事がない。そこで司馬光は、それを記した『史記』呂太后本紀を引いて補足した。ところが、こちらは、

齊王欲發兵、其相弗聽。八月、丙午、齊王欲使人誅相、相召平適反、舉兵欲圍王。王因殺其相。

と、おもに「相」で書かれている。つまり、呼称の不統一は史料段階から生じており、『資治通鑑』はそれをそのまま合成したため、不統一を引きずってしまったのである。司馬光が二つの史料を組み合わせた手法が巧妙であるだけに、最後の仕上げを欠いたのは惜しむべきであろう。

## 十六

民有歌淮南王者曰、一尺布、尚可縫、一斗粟、尚可舂、兄弟二人、不相容。帝聞而病之。八年、夏、封淮南厲王子安等四人爲列侯。賈誼知上必將復王之也、上疏諫曰、淮南王之悖逆無道、天下孰不知其罪。陛下幸而赦遷之、自疾而死、天下孰以王死之不當。今奉尊罪人之子、適足以負謗於天下耳。此人少壯、豈能忘其父哉。……所謂假賊兵、爲虎翼者也。願陛下少留計。上弗聽。

（十四／四八〇）

漢紀六、文帝の前七年（前一七三）から翌年にかけての記事。文帝の異母弟で、謀反を企てた淮南王劉長が配流の途上で憤死したのち、文帝を諷刺する歌謡が民間に流行したため、文帝は劉長の子の劉安らを列侯に封じた。賈誼は彼らの報復を懸念して諫めたが、文帝は聴き容れなかった。それを記した一段である。この一段の史料となっている

のは、「爲列侯」までが『史記』淮南・衡山列伝および『漢書』淮南厲王伝、「賈誼知」以下が『漢書』賈誼伝だが、前半部分については、『史記』や『漢書』の淮南伝と『資治通鑑』とで、かなりの相違がある。たとえば『史記』の記述は以下のとおりである。

孝文八年、上憐淮南王。淮南王有子四人、皆七八歲。乃封子安爲阜陵侯、子勃爲安陽侯、子賜爲陽周侯、子良爲東成侯。孝文十二年、民有作歌、歌淮南厲王。曰、一尺布、尚可縫、一斗粟、尚可舂、兄弟二人、不能相容。上聞之、乃歎曰、堯・舜放逐骨肉、周公殺管・蔡、天下稱聖。何者、不以私害公。天下豈以我爲貪淮南王地邪。乃徙城陽王、王淮南故地、而追尊諡淮南王爲厲王、置園復如諸侯儀。

『漢書』淮南厲王伝もこれとほぼ同様で、そのため南宋の王益之『西漢年紀』は『資治通鑑』を誤りとしている。<sup>2)</sup>しかし、簡単にそう言い切つてよいものだろうか。それを考察するのが本章の目的なのだが、作業に入る前に、『史記』『漢書』『資治通鑑』のいずれとも異なる説も存在するので、併せて挙げておきたい。後漢の高誘が『淮南子』敍目に記すものがそれである。

〔劉長〕坐徙蜀嚴道、死於雍。上聞之、封其四子爲列侯。時民歌之曰、一尺繒、好童童、一升粟、飽蓬蓬、兄弟二人、不能相容。上聞之曰、以我貪其地邪。乃召四侯而封之。其一人病薨、長子安襲封淮南王、次爲衡山王、次爲廬陵王。太傅賈誼諫曰、怨讎之人、不可貴也。後、淮南・衡山卒反、如賈誼言。<sup>3)</sup>

さて、以上の三者を整理すると、みずからを諷刺する歌謡を耳にした文帝の取った措置が、『史記』『漢書』では城陽王劉喜の淮南転封、『淮南子』敍目では劉安らの封王、そして『資治通鑑』では彼らの封侯と、それぞれ異なっていることがわかるだろう。一体、どれが正しいのだろうか。いささか煩雑になるのを承知で、しばらく考察をめぐらせて

みたい。まず、比較的容易にわかるのは『淮南子』敍目の誤りである。高誘は、劉安らの封王を知った賈誼が諫言を行なったとするが、これは『漢書』賈誼伝に、

時又封淮南厲王四子、皆爲列侯。誼知上必將復王之也、上疏諫曰……淮南王之悖逆亡道、天下孰不知其辜……

とあるように、前八年（前一七二）の劉安らの封侯の際の諫言とするのが正しい。それが前十六年（前一六四）に行なわれた彼らの封王を承けてのものではあり得ないのは、賈誼が前十二年（前一六八）に没していることからして明らかだろう。『淮南子』敍目は歌謡の異文を記した史料としては貴重だが、事実関係は信用できないのである。次に『史記』『漢書』の淮南伝について検討しよう。右に引いたとおり、それらは前十二年に歌謡が流行し、そのため文帝は劉喜を淮南王に移したと言ふ。ところが『史記』漢興以来諸侯王年表や『漢書』諸侯王表では、劉喜の転封は前十一年（前一六九）の出来事とされている。『史記』『漢書』の紀伝と表とが食い違ふのはしばしば見受けられる現象で、一概にどちらが信用できるとは言えないが、司馬光はここでは表を信用したらしく、『資治通鑑』ではそれを前十一年に置いている。このように劉喜の転封を一年繰り上げた結果、前十二年に歌謡が流行したという淮南伝の記述は、司馬光にとつて根拠のないものとなったのである。それでは歌謡の流行も一年だけ繰り上げるに止めればよいものを、司馬光がそうしなかったのは、歌謡の内容と関係があるのかもしれない。くだんの歌謡は文帝が弟を庇つてやらなかったことを諷刺したもので、こうした内容は、劉長が死んだ前六年（前一七四）からさほど遠くない時期に歌われる方が自然だろう。そこで司馬光は、それを前七年にまで繰り上げ、翌年の劉安らの封侯と対応させたのではなからうか。以上もまた推測であるが、それなりに司馬光の史料操作の理由を説明できるわけで、『資治通鑑』の記述が誤りだと軽々には断定でき

ないように思われるのである。

- (1) 歌謡のことが出てきたついでに付記しておく。司馬光は、何らかの政治事件に直接関係する歌謡はなるべく『資治通鑑』に採録するように努めているが、いたずらに悲歌慷慨する類のものは、その多くを削除している。たとえば本稿で扱う範囲で言えば、朱虚侯劉章が呂氏の専権を諷刺して歌った「耕田歌」は漢紀五(十三/四二七)に採録されているが、有名な項羽の「虞美人歌」や劉邦の「大風歌」などは、全て削除されている。施丁「兩司馬史學異同管見」(『資治通鑑』叢論)所収、河南人民出版社、一九八五、二三一頁)は「虞美人歌」の削除を取り上げて、「寫人物而無心聲」と批判するが、言うまでもなく、司馬光が『資治通鑑』を編纂した目的は、「人物の心聲」を描きだすことであつたのではないのである。
- (2) 王益之『西漢年紀』卷八(中州古籍出版社、一九九三、一二八頁)に、「考異曰、通鑑載於七年、非也」とある。
- (3) 『淮南子』敘目の記述は、『淮南子』天文訓の許慎注に、「一曰、淮南王長、孝文皇帝異母弟也。僭號自稱東帝、以徒嚴道、道死于讎。其四子皆爲列侯。時人歌之曰、一尺繒、好童童、一斗粟、飽蓬蓬、兄弟二人、不能相容。文帝聞之曰、以我爲利其地耶。皆召四侯而王之。是則淮南王安即位之元年、以紀時也」とあるものに基づいている。
- (4) 『資治通鑑』漢紀七(十五/四八四)に、「徙城陽王喜爲淮南王」とある。
- (5) あるいは司馬光は、先に歌謡の内容を考えて『史記』『漢書』の淮南伝の記述に疑問を抱き、その結果、劉喜の転封も淮南伝ではなく表に従つたのかもしれない。この場合は本文の考察と比べて因果関係が逆になるが、司馬光の史料操作の理由がそれなりに説明できることに変わりはない。

## 十七

初、梁孝王以至親有功、得賜天子旌旗、從千乘萬騎、出蹕入警。王寵信羊勝・公孫詭、以詭爲中尉。勝・詭多奇邪計、欲使王求爲漢嗣。栗太子之廢也、太后意欲以梁王爲嗣。嘗因置酒謂帝曰、安車大駕、用梁王爲寄。帝跪席舉身曰、諾。罷酒、帝以訪諸大臣。大臣袁盎等曰、不可。昔、宋宣公不立子而立弟、以生禍亂、五世不絕。小不忍、害大義、故春秋大居正。由是太后議格、遂不復言。(十六/五三五)

是時、太后憂梁事不食、日夜泣不止。帝亦患之。會田叔等按梁事來還、至霸昌廄、取火悉燒梁之獄辭、空手來見帝。帝曰、梁有之乎。叔對曰、死罪、有之。上曰、其事安在。田叔曰、上母以梁事爲問也。上曰、何也。曰、今梁王不伏誅、是漢法不行也。伏法而太后食不甘味、臥不安席、此憂在陛下也。上大然之、使叔等謁太后、且曰、梁王不知也。造爲之者、獨在幸臣羊勝・公孫詭之屬爲之耳。謹已伏誅死、梁王無恙也。太后聞之、立起坐餐、氣平復。(十六/五三七)

漢紀八、景帝の中二年(前一四八)の記事。景帝の同母弟であつた梁王劉武に関する記事である。前段は、母の竇太后が劉武を景帝の継嗣にと望んだが、袁盎らの反対で沙汰止みになったことを記し、後段は、劉武が袁盎らを暗殺したため、調査に赴いた田叔が景帝に行なった報告と、景帝の竇太后への対応とを記している。これらのおもな史料は、前段が『史記』梁孝王世家および『漢書』文三王伝、後段が『史記』や『漢書』の田叔伝だが、それらは完全な記録ではない。たとえば、前段に対応する『史記』梁孝王世家は次のように言う。

(景帝前七年)十一月、上廢栗太子。竇太后心欲以孝王爲後嗣。大臣及袁盎等、有所關說於景帝。竇太后議格、亦遂不復言以梁王爲嗣事。由此以事祕、世莫知。

皇帝の継嗣選定は国家の重要機密で、しかも景帝の継嗣問題は結果的に跡を継いだ武帝と直接に関わるため、それが司馬遷の当時に秘せられていたのは、やむを得ないことであろう。しかし、歴史を読む側としては、竇太后と景帝の間でいかなる交渉が行なわれたのかは一番知りたい点であり、それを記録していない『史記』は、何となく物足りない。また、後段に対応する『史記』田叔列伝は次のように言う。

梁孝王使人殺故吳相袁盎。景帝召田叔案梁、具得其事、還報。景帝曰、梁有之乎。叔對曰、死罪、有之。上曰、其事安在。田叔曰、上毋以梁事爲也。上曰、何也。曰、今梁王不伏誅、是漢法不行也。如其伏法而太后食不甘味、臥不安席、此憂在陛下也。景帝大賢之、以爲魯相。

田叔列伝が田叔の事蹟に終始するのはこれまた当然だが、袁盎暗殺事件は、もとを正せば竇太后の劉武への溺愛から生じたもので、事件を知った竇太后がどのような態度を取ったのか、また景帝がそれにどう対処したのかは、やはり興味あるところである。しかし、『史記』はそれも記録していない。梁孝王世家や田叔列伝のみならず、それらは『史記』『漢書』のどこにも記されていないのである。だが、我々の知っていたことを教えてくれる史料がある。それは、前漢の褚少孫が『史記』梁孝王世家に書き加えた「補遺」の部分である。

褚先生曰……蓋聞、梁王西入朝、謁竇太后、燕見、與景帝俱侍坐於太后前、語言私說。太后謂帝曰、吾聞殷道親親、周道尊尊、其義一也。安車大駕、用梁孝王爲寄。帝跪席舉身曰、諾。罷酒出、帝召袁盎諸大臣通經術者曰、太后言如是、何謂也。皆對曰、太后意欲立梁王爲帝太子。帝問其狀。袁盎等曰……

太后不食、日夜泣不止。景帝甚憂之、問公卿大臣。大臣以爲遣經術吏往治之、乃可解。於是遣田叔・呂季主往治之。此二人皆通經術、知大禮。來還、至霸昌廐、取火悉燒梁之反辭、但空手來對景

帝。景帝曰、何如。對曰、言梁王不知也。造爲之者、獨其幸臣羊勝・公孫詭之屬爲之耳。謹以伏誅死、梁王無恙也。景帝喜說曰、急趨謁太后。太后聞之、立起坐食、氣平復。

司馬光はこれを『史記』『漢書』から得た史料と組み合わせ、『資治通鑑』の記事を作成したのである。しかも、ただ組み合わせただけではなく、『補遺』には景帝が劉武を無罪と信じたように記されているのを巧みに書き替え、田叔伝と矛盾しないように工夫している。まことに見事な手際と言うべきであろう。ところで、褚少孫の「補遺」は歴代評判が悪く、司馬光もそれは承知していたと思われる。にもかかわらずそれを利用したのは、もちろん我々の興味を適えようとしたためではない。司馬光にとっての読者は、数ならぬ我々ではなく皇帝であった。彼は皇帝に、継嗣選定にはくれぐれも慎重を期すべきこと、家族道徳が如何に重要であるかということを説くため、敢えて評判の悪い史料を引いてまで、詳細な史実を提供しようとしただけのことなのである。しかし、それはそれ、『資治通鑑』が結果として我々にとってもおもしろい歴史書に仕上がっていることは否定できないし、否定する必要もないだろう。

(1) 司馬光は、仁宗朝の末期には從子にあたる英宗を皇太子に冊立することに尽力し、英宗朝では仁宗の皇后であった曹太后と英宗との仲をとりもつことに奔走した。皇帝の継嗣選定や家族道徳の問題は、決して一般論として提示されたのではなく、司馬光自身の体験から発せられているのである。

(2) 『資治通鑑』が褚少孫の「補遺」を引く箇所は他にもあるが、比較的まとまった記事としては次の例が挙げられる。「後數日、帝譴責鈞、夫人脱簪珥、叩頭。帝曰、引持去、送掖庭獄。夫人還視。帝曰、趣行、汝不得活。卒賜死。頃之、帝問居、問左右曰、外人言云何。左右對曰、人言、且立其子、何去其母乎。帝曰、然。是非兒曹愚人之所

知也。往古國家所以亂、由主少、母壯也。女主獨居驕蹇、淫亂自恣、莫能禁也。汝不聞呂后邪。故不得不先去之也」。これは漢紀十四、武帝の後元元年（前八十八、二十二／七四四）に記された、鉤弋夫人つまり趙婕妤に死を賜った際の話で、もとは『史記』外戚世家の「補遺」に見える。

## 十八

又嘗夜至柏谷、投逆旅宿、就逆旅主人求漿。主人翁曰、無漿、正有溺耳。且疑上爲姦盜、聚少年欲攻之。主人嫗睹上狀貌而異之、止其翁曰、客非常人也、且又有備、不可圖也。翁不聽。嫗飲翁以酒、醉而縛之。少年皆散走、嫗乃殺雞爲食以謝客。明日、上歸、召嫗、賜金千斤、拜其夫爲羽林郎。

（十七／五六三）

漢紀九、武帝の建元三年（前一三八）の記事。若き日の武帝がお忍びで旅館に泊まり、おやじに盗賊と間違えられたが、おかみの機転で助かったという話である。この直前にも、武帝が微行を繰り返したあげくに逮捕された話が記されているが、これは『漢書』東方朔伝に拠っている。しかし、冒頭に掲げた話は『史記』や『漢書』には見えない。それでは司馬光が何を史料にしたかと言うと、それは『漢武故事』という書物である。『漢武故事』は班固の撰と伝えられ、『隋書』経籍志・史部・旧事類に著録されており、のちの書目にも二巻本あるいは五巻本として見える。通行のテキストには『説郛』本や『四庫全書』本などがあり、ほかに魯迅の輯佚したテキストが『古小説鉤沈』に収められている。しかし、班固の撰とするのは仮託で、現在では魏晉のころの成立と考えられており、分類も史部ではなく子部の小説類に入れるのが普通である。要するに、『漢武故事』は後世に武帝を主人

公として作られた物語の一種で、信頼できる史料では決していない。実は、そのことは司馬光も承知しており、『資治通鑑』漢紀十、武帝の元光四年（前一三一）の「冬、十二月、晦、論殺魏其於渭城」という記事の「考異」で次のように述べている。

考異曰、班固漢武故事曰、上召大臣議之、羣臣多是寶嬰。上亦不復窮問、兩罷之。田蚡大恨、欲自殺、先與太后訣、兄弟共號哭訴太后。太后亦哭、弗食。上不得已、遂乃殺嬰。按漢武故事、語多誕妄、非班固書。蓋後人爲之、託固名耳。 （十八／五八五）

このように司馬光は『漢武故事』を「語多誕妄」と酷評するのだが、不思議なことに、『資治通鑑』には『漢武故事』を史料に用いたと思われる記事が散見する。引用がいささか多くなるが、試みにそれらを列挙してみよう。

イ、寶太主恃功、求請無厭、上患之。皇后驕妬、擅寵而無子、與醫錢凡九千萬、欲以求子、然卒無之。后寵浸衰。皇太后謂上曰、汝新即位、大臣未服。先爲明堂、太皇太后已怒。今又忤長主、必重得罪。婦人性易悅耳。宜深慎之。上乃於長主・皇后復稍加恩禮。 （十七／五五九）

ロ、寶太主慙懼、稽顙謝上。上曰、皇后所爲不軌於大義、不得不廢。主當信道以自慰、勿受妄言以生嫌懼。后雖廢、供奉如法、長門無異上宮也。 （十八／五九二）

ハ、上招延士大夫、常如不足。然性嚴峻、群臣雖素所愛信者、或小有犯法、或欺罔、輒按誅之、無所寬假。汲黯諫曰、陛下求賢甚勞、未盡其用、輒已殺之。以有限之士恣無已之誅、臣恐天下賢才將盡、陛下誰與共爲治乎。黯言之甚怒。上笑而諭之曰、何世無才、患人不能識之耳。苟能識之、何患無人。夫所謂才者、猶有用之器也。有才而不肯盡用、與無才同。不殺何施。黯曰、臣雖不能以言屈陛下、而心猶以爲非。願陛下自今改之、無以臣

爲愚而不知理也。上顧羣臣曰、黯自言爲便辟、則不可。自言爲愚、豈不信然乎。  
(十九／六三七)

二、上乃還、祭黃帝冢橋山、釋兵須如。上曰、吾聞黃帝不死、今有冢、何也。公孫卿曰、黃帝已仙上天、羣臣思慕、葬其衣冠。上歎曰、吾後升天、羣臣亦當葬吾衣冠於東陵乎。

(二十／六七七)

ホ、上居建章宮、見一男子帶劍入中龍華門、疑其異人、命收之。

男子捐劍走、逐之弗獲。上怒、斬門候。冬、十一月、發三輔騎士大搜上林、閉長安城門索、十一日乃解。(二十二／七二五)  
へ、春、正月、上行幸東萊、臨大海、欲浮海求神山。羣臣諫、上弗聽。而大風晦冥、海水沸湧、上留十餘日、不得御樓船、乃還。

(二十二／七三七)

ト、上乃言曰、朕即位以來、所爲狂悖、使天下愁苦、不可追悔。自今事有傷害百姓、糜費天下者、悉罷之。田千秋曰、方士言神仙者甚衆、而無顯功、臣請皆罷斥遣之。上曰、大鴻臚言是也。於是悉罷諸方士候神人者。是後、上每對羣臣自歎、晷時愚惑、爲方士所欺。天下豈有仙人。盡妖妄耳。節食服藥、差可少病而已。  
(二十二／七三八)

イの「皇后驕妬」から「然卒無之」までは『史記』外戚世家や『漢書』外戚伝にはほぼ同じ記述があるが、それを挟む前後は『史記』『漢書』にはなく、通行本の『漢武故事』に見える。恐らく司馬光は、三者を組み合わせて『資治通鑑』の記事を作成したのであろう。ロは、「后雖廢」以下の一文がやはり通行本に見えるが、「以生嫌懼」までは、『史記』『漢書』はもとより、通行本・魯迅輯本にも見えない。そのため別の史料に拠ったとも考えられるが、一連の記事であることからすれば、同じく『漢武故事』から引いた可能性が高い。そしてハからトまでは、いずれも魯迅輯本に見えている。他にも見落したものがあられるかもしれ

ないが、右に並べた事例だけでも、『資治通鑑』には『漢武故事』を史料とした記事の多いことがわかるだろう。<sup>③</sup>このように、司馬光は『漢武故事』を酷評したにもかかわらず、一方でそれを頻繁に利用しているのである。これは一見矛盾した態度のようだが、後年、彼は弟子の范祖禹に『資治通鑑』の編纂方法を告げた中で、

其實錄・正史、未必皆可據、雜史・小説、未必皆無憑。在高鑑擇之。<sup>④</sup>

と言っている。このように、小説であっても、高い見識で史料鑑別を行ないさえすれば、その記事を史料に用いてもかまわないというのは、『資治通鑑』編纂の基本方針の一つであった。それに照らせば、司馬光が『漢武故事』を利用したのも別段不思議ではない。しかも、『資治通鑑』が採録した『漢武故事』の記事をながめれば、それらは若き日の武帝の人となりや汲黯の実直さ、あるいは上林苑内搜索の原因<sup>⑤</sup>、さらには武帝晩年の悔恨などを伝えるものとして一定の価値を持つており、司馬光が見識に『漢武故事』を引用したのではないことがわかる。実際、『漢武故事』に記された数多の怪異譚は、『資治通鑑』には全く採録されていないのである。

(1) 『資治通鑑證補』はこの記事の出典について、「漢武故事。見文選潘岳西征賦注、文略。今漢武故事逸之」と言う。ここに言う「今の漢武故事」とは『說郛』本などの通行本のことで、確かにそこにはこの記事は見えない。また、『文選』西征賦の李善注に引く『漢武故事』も、石川安貞の言うとおり、簡略である。しかし、『太平御覽』卷八十八に引く『漢武故事』にはこの記事のほぼ全文が見えるので、これが『漢武故事』に拠っていることは疑いない。

(2) 宋代の書目について言えば、『崇文總目』史部・雜史類に「五卷」、晁公武『郡齋讀書志』史部・伝記類に「二卷」として著録されている。『太平御覽』に引く『漢武故事』が通行本には見えない記事を多く含

んでいることからすれば、北宋時代には、完全ではないにせよ、より原本に近い形のテキストが伝わっていたのかもしれない。

- (3) 『漢武故事』の成立や伝承については、余嘉錫『四庫提要辨證』卷十八(香港中華書局、一九七四、一二二頁)、小南一郎『中國の神話と物語』第一章、第二節、また第二章、第一節(岩波書店、一九八四、二六頁、また一〇三頁)などに詳しい。

- (4) 司馬光は、他に、『資治通鑑』漢紀十(十八/五九二)、漢紀十三(二十一/六九三)、漢紀十四(二十二/七三三)の「考異」でも『漢武故事』を引いた上で、その記述が「妄」であるとして退けている。

- (5) ここでは『史記』『漢書』やその注釈と共通するものは取り上げなかった。たとえば、本稿十四の注(3)に引いた王夫人が懷妊した時の話や、十一の注(5)に引いた柏梁臺のことは、『漢武故事』に見えるとともに、『史記』『漢書』や『史記索隱』にも載せられているので、『漢武故事』に拠った記事とは数えなかった。ただ二については、『史記』孝武本紀や封禪書、および『漢書』郊祀志にもほぼ同様の記事が見えるが、同条の「考異」に「史記・漢書皆云、或對。漢武故事云、公孫卿對。今取之」とあるため、事例のうちに入れた。

- (6) 司馬光は『漢武故事』を史料としただけでなく、『史記』『漢書』の文字の校訂をする際にも利用している。注(5)に挙げた二のケースがそうだが、他に、漢紀十二(二十/六六一)の「於是上使驗小方、闔旗、旗自相觸擊」という記事の「考異」に、「封禪書・郊祀志皆作某、獨史記孝武紀作旗。按漢武故事云、大嘗於殿前樹旗數百枚、大令旗自相擊、繙繙竟庭中、去地十餘丈、觀者皆駭。然則作旗字者是也」と言うのもそれに当たるだろう。

- (7) 「答范夢得」(『司馬文正公傳家集』卷六十三)。この書簡は神宗の熙寧四年(一〇七二)ごろにしたためられたもので、一方、『資治通鑑』の前漢部分は英宗の治平四年(一〇六七)ごろに完成していたと考えられている。前漢部分の完成年次については、木田知生『司馬光とその時代』(白帝社、一九九四、一三七頁)に詳しい。

- (8) 上林苑内が搜索されたことは『漢書』武帝紀に見えるが、搜索の原

因は記されておらず、それを記すものは『漢武故事』以外にないのである。

## 十九

初、孝景時、魏其侯竇嬰爲大將軍、武安侯田蚡乃爲諸郎、侍酒跪起如子姪。已而蚡日益貴幸、爲丞相。魏其失勢、賓客益衰。(師古曰、言素爲嬰之賓客者、漸以衰退、不復往也)。獨故燕相穎陰灌夫不去。嬰乃厚遇夫、相爲引重、其游如父子然。夫爲人剛直、使酒、諸有勢在己之右者必陵之、數因酒忤丞相。丞相乃奏案、灌夫家屬橫潁川、民苦之。收繫夫及支屬、皆得棄市罪。(十八/五八四)

漢紀十、武帝の元光三年(前一三二)の記事。竇嬰が田蚡に権力を奪われたために賓客が去り、ただ一人残った灌夫も田蚡と対立して処刑されることになったという一段で、括弧内は胡三省が引いた顔師古の『漢書注』である。この後には、竇嬰が灌夫を弁護したため、併せて処刑されたという記事が続く。史料となっているのは『史記』魏其・武安侯列伝および『漢書』竇嬰・田蚡伝で、『資治通鑑』はそれらをかなり要略しているが、記事自体にとりたてて問題はない。ただ一つ、気になるのは、胡三省の引く『漢書注』には竇嬰の賓客が去ったとあるのに対し、元来の『漢書注』には、

師古曰、以夫居家、而卿相待中素爲夫之賓客者、漸以衰退、不復往也。

とあり、去ったのは灌夫の賓客とされていることである。<sup>1)</sup> どうやら胡三省は『漢書注』を誤って引いたらしいが、どうしてこのような誤りが起きたのだろうか。実は、竇嬰・灌夫の二人とも、賓客に去ってゆかれた経験があった。竇嬰の場合は、『資治通鑑』に見えるとおり、田

蚡に權力を奪われたためで、それを『漢書』は、

蚡雖不任職、以王太后故親幸、數言事、多效。士吏趨勢利者、皆去嬰而歸蚡。……而嬰失寶太后、益疏不用、無勢。諸公稍自引而怠驚、唯灌夫獨否。

と記している。一方、灌夫の場合は、法に触れて燕の相を解任され、しばらく家居を餘儀なくされたためで、それを『漢書』は、

夫不好文學、喜任俠、已然諾。諸所與交通、無非豪桀大猾、家累數千萬、食客日數十百人。……夫家居、卿相待中賓客益衰。

と記している。そして、右に掲げた元来の『漢書注』は、この「賓客益衰」に付けられたものである。さて、司馬光は『資治通鑑』を編纂するに際して、寶嬰のケースを要略し、灌夫のそれは削除した。その時、削除した部分から「賓客益衰」だけを借り、寶嬰の記事に流用したのである。あるいは、これは流用ではなく、二人のことを混同したのかもしれないが、たとえ混同したにせよ、結果的に事実誤認が生じたわけではない。だから、『資治通鑑』の記事自体に問題はないのである。このように、司馬光にとっては、寶嬰の記事の要略作業は首尾よく片付いたけれども、胡三省は困ったことだろう。なにしろ、『資治通鑑』の文脈では寶嬰の賓客が去ったとしか読めないが、『漢書注』では灌夫の賓客となっているのだから。こうした場合は何も注を付けないのが上策で、付けるならば自分のことばで書けばよいものを、胡三省は根が正直なのか、わざわざ「師古曰」とした上で、『資治通鑑』と合わせるために「夫」を「嬰」に書き替える道を選んだ。つまり、胡三省は『漢書注』を誤って引いたのではなく、我々のために書き改めてくれたのである。もし、それが誤りに見えたすれば、非は、胡三省ではなく、司馬光と我々にあることになるだろう。

(1) 胡三省の引く『漢書注』については、『資治通鑑證補』も「臣安貞謹

按、漢注作夫之賓客」と注記している。

## 二十

主父偃説上曰、茂陵初立、天下豪傑、并兼之家、亂衆之民、皆可徙茂陵。内實京師、外銷姦猾、此所謂不誅而害除。上從之、徙郡國豪傑及皆三百萬以上于茂陵。軹人郭解、關東大俠也。亦在徙中。衛將軍爲言、郭解家貧、不中徙。上曰、解、布衣、權至使將軍爲言、此其家不貧。卒徙解家。

(十八/六〇五)

漢紀十、武帝の元朔二年(前一二七)の記事。俠客として有名な郭解が茂陵に移住させられたことを記した一段である。史料となっているのは、「上從之」までが『史記』や『漢書』の主父偃伝、「徙郡國豪傑及皆三百萬以上于茂陵」の一文が『漢書』武帝紀、そして「軹人郭解」以下が『史記』や『漢書』の游俠伝だが、それらの中で游俠伝には『資治通鑑』に見えない記述がある。いま、それを『史記』から引用しよう。

及徙豪富茂陵也、解家貧、不中徙。吏恐、不敢不徙。衛將軍爲言、郭解家貧、不中徙。上曰……

郭解は資産額で移住の基準に満たなかったが、担当の官吏が彼を除いたことを上役から責められるのを恐れて移住者に含めた、という記事である。この記事の意義は大きい。これがなければ、郭解の移住が正当であったのか否か、また、衛青の発言が正論か、それとも郭解の請託を受けたのが曖昧になってしまいうからである。どうして司馬光はこのように重要な記事を削除したのだろうか。それを考えるために、司馬遷・班固・司馬光それぞれの游俠に対する姿勢を整理しておこう。まず司馬遷は、生まれつきの不羈なる性格から、また悲惨な宮刑の

体験から、游侠に共感するところが多く、その感情は『史記』游侠列伝に横溢している。一方、班固は『漢書』游侠伝の序で游侠を厳しく批判し、郭解を「其罪已不容於誅矣」と切り捨てた。彼は儒者の立場から游侠を断罪したのである。以上は司馬遷と班固を比較する際に常に取り上げられる論点の一つだが、それでは司馬光と云えば、彼は班固よりもさらに厳しい姿勢で游侠に臨んだようである。たとえば司馬光は、司馬遷はもとより、班固も記録に残した劇孟という人物について、『資治通鑑』漢紀八、景帝の前三年（前一五四）の「考異」で次のように述べている。

考異曰、史記・漢書皆云、大尉得劇孟喜、如得一敵國、曰、呉・楚無足憂者。按孟一游侠之士耳。亞父得之、何足爲輕重。蓋其徒欲爲孟重名、妄撰此言、不足信也。

（十六／五二四）

司馬光は、呉楚七国の乱の鎮圧に赴いた周亞父が劇孟を味方に得て、一国を破ったほどに喜んだとする『史記』『漢書』の游侠伝の記事を信ずるに足らずと決めつけ、結果的に劇孟を歴史から抹殺したのである。そして、このように厳しい姿勢は郭解に対しても貫かれた。彼は郭解の記事のあとに史論を立てて『漢書』游侠伝の序を引き、さらに同じく激しい口調で游侠を批判した荀悦『漢紀』の論を並べている。

これだけでも充分であろうに、司馬光は並行して一つの細工を行なった。それが先の游侠伝の記事の削除である。恐らく、司馬光は次のように考えたのだろう。――お上が游侠に下した処分が不当であつてはならない。しかし、この記事はその不当を示している。これは皇帝陛下にお見せするのはもちろん、わしにとつても都合が悪い。できることなら書き替えて白を黒と言いくるめたいが、まさかそうもゆかぬから、せめてこれを削除して、郭解の移住が正当であつたのか否かを曖昧にしておこう。ただ、そうすると衛青の発言の是非も曖昧になるが、たかが衛青の名誉など、お上の威光を害なうことに比べれば、いかほ

どでもあるまい――と。だとすれば、ここにもまた『資治通鑑』の主観的な一面を見て取れるであろう。

（１）近いものでは、施丁「馬班異同三論」（『司馬遷研究新論』所収、河南人民出版社、一九八二、二七四頁）、朴宰雨『史記』『漢書』比較研究第二章、第三節（中國文學出版社、一九九四、六十頁）などがそれに言及している。

（２）司馬光の劇孟に対する扱いについて、朱熹は「子房・劇孟、皆溫公好惡所在。然著其事而立論以明之可也。豈可以有無其事爲褒貶。溫公此樣處議論極純」（『朱子語類』卷一三四）と述べた。とは言え、朱熹が『資治通鑑綱目』に劇孟のことを書き入れたわけではないのだが、（３）もとは『漢紀』卷十、建元二年の条に記された論である。

## 二十一

上嘉匈奴單于之義、遣中郎將蘇武送匈奴使留在漢者、因厚賂單于、答其善意。……會緱王與長水虞常等、及衛律所將降者、陰相與謀劫單于母闕氏歸漢。衛律者、父故長水胡人。律善協律都尉李延年、延年薦言律使於匈奴。使還、聞延年家收、遂亡降匈奴。單于愛之、與謀國事、立爲丁靈王。虞常在漢時、素與副張勝相知、私候勝曰……

（二十一／七〇九）

漢紀十三、武帝的天漢元年（前一〇〇）の記事。蘇武が匈奴に使いした時、おりしも匈奴では虞常らの陰謀が進行していた。それを記した一段で、中間に衛律の紹介が嵌め込まれている。また、この後には、副使の張勝が陰謀に加担したため、正使の蘇武も逮捕され、硬軟とり混ぜた取り調べの末、北海のほとりに抑留されたという記事が続く。史料となっているのは、「衛律者」から「立爲丁靈王」までが『漢書』

李陵伝、それを挟む前後が『漢書』蘇武伝である。ここで取り上げたいのは蘇武のことではなく衛律のほうで、問題は衛律がいっつ丁靈王になったのかにある。『資治通鑑』によれば、それは天漢元年もしくはそれ以前と思われるが、はたして『漢書』ではどうだろうか。以下に李陵伝から当該箇所を引こう。

陵痛其家以李緒而誅、使人刺殺緒。大闕氏欲殺陵、單于匿之北方、大闕氏死、迺還。單于壯陵、以女妻之、立爲右校王、衛律爲丁靈王、皆貴用事。衛律者、父本長水胡人。律生長漢、善協律都尉李延年、延年薦言律使匈奴。使還、會延年家收、律懼并誅、亡還降匈奴。匈奴愛之、常在單于左右。陵居外、有大事、迺入議。

このように『漢書』は、衛律が丁靈王になったのは、李陵が右校王になったのと同じ時だと言う。だとすれば、それは天漢四年（前九十七）のこととなる。そこで『資治通鑑』漢紀十四、天漢四年の条を見てみると、次のように記されている。

陵使人刺殺緒。大闕氏欲殺陵、單于匿之北方、大闕氏死、乃還。單于以女妻之、立爲右校王、與衛律皆貴用事。衛律常在單于左右。陵居外、有大事、乃入議。  
(二十二／七二一)

こうして並べれば、『資治通鑑』は『漢書』の「爲丁靈王」と「衛律者……匈奴愛之」とを引き抜いて天漢元年に移し、あとを天漢四年に残したことがわかるだろう。『資治通鑑』で衛律が初めて登場するのが天漢元年だから、彼の紹介をそこに繰り上げたのは当然だとしても、どうして「爲丁靈王」まで繰り上げる必要があったのだろうか。それは、衛律が丁靈王になったのが天漢四年だとすれば、一つの矛盾が生じるためである。

律曰、蘇君、律前負漢歸匈奴、幸蒙大恩、賜號稱王、擁衆數萬、馬畜彌山、富貴如此。蘇君今日降、明日復然。空以身膏草野、誰復知之。武不應。

『漢書』蘇武伝が記す、衛律が蘇武を取り調べた時の一場面である。

この取り調べは蘇武が逮捕された直後に行なわれたから、天漢元年の出来事に違いない。ここで衛律は、みづから「賜號稱王」と語っている。すると、彼はすでに天漢元年には「王」になっていたのであり、天漢四年に丁靈王になったとする、同じ『漢書』李陵伝の記述と矛盾するのだ。もっとも、ここに言う「王」が丁靈王とは別のものだと考えるなり、蘇武を懐柔するために衛律が「王」を詐称したのだと考えるなりすれば、矛盾は解消するけれども、それは無理な解釈だろう<sup>3)</sup>。やはり、『漢書』の記述は矛盾していると言わねばなるまい。司馬光はそれに気付き、「爲丁靈王」の一句を天漢元年に繰り上げるという史料操作を行なうことで、その矛盾の解消を図ったのである。これは小さな事例だが、司馬光が細心の注意を払って『資治通鑑』を編纂していたことは、この一事からもわかるだろう。

(1) 林幹「匈奴歴史年表」(北京中華書局、一九八四、三十七頁)も、天漢四年に「單于立長水胡人衛律爲丁靈王」の記事を置いている。ただ、

林幹も疑問を抱いたのか、それに「本條姑繫于此」と注記している。

(2) 『資治通鑑』も漢紀十三、天漢元年(二十一／七一〇)にこの記事を置いている。文章も『漢書』と全く同じである。

(3) 『漢書』李陵伝の「立爲右校王、衛律爲丁靈王」を「立てて右校王と爲す。衛律 丁靈王爲り」と訓読し、「李陵を右校王に立てた。衛律は丁靈王であった」と解釈すれば、やはり矛盾は解消するが、これも文章の流れから見て不自然だろう。

## 二十二

初、上年二十九、乃生戾太子、甚愛之。及長、性仁恕溫謹、上嫌其材能少、不類己。而所幸王夫人生子閼、李姬生子旦・賀、李夫人生子

體、皇后・太子寵浸衰、常有不自安之意。……太子每諫征伐四夷、上笑曰、吾當其勞、以逸遺汝、不亦可乎。

(二十二／七二六)

上每行幸、常以後事付太子、宮内付皇后。有所平決、還白其最、上亦無異、有時不省也。上用法嚴、多任深刻吏。太子寬厚、多所平反、雖得百姓心、而用法大臣皆不悅。……衛青薨、臣下無復外家爲據、競欲構太子。

(二十二／七二七)

上與諸子疏、皇后希得見。太子嘗謁皇后、移日乃出。黃門蘇文告上曰、太子與宮人戲。上益太子宮人滿二百人。太子後知之、心銜文。……皇后亦善自防閑、避嫌疑、雖久無寵、尚被禮遇。

(同右)

是時、方士及諸神巫、多聚京師、率皆左道惑衆、變幻無所不爲。女巫往來宮中、教美人度厄、每屋輒埋木人祭祀之。因妬忌詆訾、更相告訐、以爲祝詛上、無道。上怒、所殺後宮、延及大臣、死者數百人。上心既以爲疑、嘗晝寢、夢木人數千持杖欲擊上。上驚寤、因是體不平、遂苦忽忽善忘。

(二十二／七二八)

漢紀十四、武帝之征和二年(前九十一)の記事。いわゆる「巫蠱の獄」前夜の記録で、第一条は衛皇后と戾太子への武帝の寵愛が衰え始めたこと、第二条は朝臣の間に戾太子を陥れようとする気運が兆したこと、第三条は蘇文らが戾太子を讒言したこと、第四条は宮中に呪術が蔓延し、武帝が病臥したことをそれぞれ記している。以下には、江充が巫蠱に名を借りて戾太子を陥れ、窮迫した戾太子は江充を斬つて兵を挙げたが、丞相劉屈氂らの率いる正規軍に敗れて都を出奔し、潜伏先で自害して果てたという記事が続く。これら続きの部分、つまり「巫蠱の獄」自体の記事は、もともと「漢書」江充伝・武五子伝・劉屈氂伝などに分散して載せられており、司馬光はそれを史料にしたと思われる。しかし、冒頭に掲げた四箇条は、「漢書」のどこにも見えない。さらに「巫蠱の獄」自体についても、「資治通鑑」には「漢書」に見えな

い記事が散見する。以下にそれらを列举しておこう。

一、充既知上意、因(胡巫檀何)言、宮中有蠱氣、(不除之、上終不差)。

(二十二／七二八)

口、充先治後宮希幸夫人、以次及皇后(太子宮、掘地縱橫、太子・皇后無復施床處。充云、於太子宮得木人尤多、又有帛書、所言不道。當奏聞)。

(二十二／七二九)

八、太子懼、問少傅石德。德懼爲師傅并誅、因謂太子曰……上存亡未可知、而姦臣如此。太子將不念秦扶蘇事邪。(太子曰、吾人子、安得擅誅。不如歸謝、幸得無罪。太子將往之甘泉、而江充持太子甚急。太子計不知所出)、遂從石德計。

(同右)

二、長安擾亂、言太子反。(蘇文迸走、得亡歸甘泉、說太子無狀。上曰、太子必懼、又忿充等、故有此變。乃使使召太子。使者不敢進、歸報曰、太子反已成、欲斬臣、臣逃歸)。

(二十二／七三〇)

イは江充伝に拠っているらしいが、括弧内はそこには見えない。ロも江充伝に類似の記述があるが、そこでは括弧内が「遂掘蠱於太子宮、得桐木人」となっており、「資治通鑑」の方がより詳しい。また、ハとニはともに武五子伝に拠っているが、括弧内はそこには見えない。さて、こうして並べると、「資治通鑑」は「漢書」を大幅に増補していることがわかるだろう。しかし、司馬光が何を史料に増補したのかとなると、これが皆目わからない。「資治通鑑證補」も「證」を空格にして出典を挙げていないし、自分なりにあれこれ探してはみたのだが、探し方が悪いのか、結局探し出せなかった。たとえば、「漢武故事」の通行本や魯迅輯本を見ても、「資治通鑑」の当該の記事と共通するものはない。さきの第四条に記された武帝の夢の話などは、いかにも「漢武故事」にありそうなのだが。また、「三輔故事」や「三輔舊事」といった書物にも「巫蠱の獄」についての記述があり、その佚文が「太平御

覽』などに残っているが、これも『資治通鑑』と共通するものではない。<sup>(1)</sup>ただ、司馬光がここでも『漢武故事』を参照したことは確かで、それは戾太子が自害した記事の「考異」に、

考異曰、漢武故事云、治隨太子反者、外連郡國數十萬人。壺關三老鄭茂上書、上感寤、赦反者、拜鄭茂爲宣慈校尉、持節、徇三輔赦太子。太子欲出、疑弗實。吏捕太子急、太子自殺。按上若赦太子、當詔吏弗捕。此說恐妄也。  
(二十二／七三三)

とあることからわかる。しかし、これを根拠に、一連の記事の史料が『漢武故事』だと即断するのは無理であろう。やはり、今のところは出典未詳としておくよりよいようだ。ただ、司馬光が『漢書』を増補した部分を通覧すれば、「巫蠱の獄」前夜の箇所では事件発生までの経緯が段階的に記述されていて、当時の雰囲気をもぎまぎと伝えるし、ハの戾太子が江充を斬るのを躊躇したことや、二の武帝が戾太子を召し寄せようとしたことも、他書には見えない異聞として貴重である。もとの史料が何であれ、そこから必要なものを的確に選び出した司馬光の見識と、それを『漢書』の記事と巧みに融合させた筆力とは、やはり高く評価されて然るべきであろう。また、その見識と筆力の結果、『資治通鑑』の漢代部分が我々にとって一定の史料価値を持つものとなっていることも、併せて知っておきたいと思う。

(1) たとえば『太平御覽』卷三六七に、「三輔故事曰、衛太子獄鼻。太子來省疾、至甘泉宮。江充告、太子勿入。陛下有詔、惡太子鼻獄、尚以紙蔽其鼻。充語武帝曰、太子不欲聞陛下膿臭、故蔽鼻。武帝怒太子、太子走還」同じく卷三二三に、「三輔舊事曰、武帝發兵攻衛太子、連鬪五日、白虎門前溝中、血流沒足」同じく卷八三〇に、「三輔舊事曰、江充爲桐人長尺、以針刺其腹、埋太子宮中。充曉醫術、因言其事」などである。

## A Note for “Comprehensive Mirror for Aid in Government” II

Masashi FUKUSHIMA

*Course of Society and Culture*

*Department of Arts and Sciences*

*Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582, Japan*

### 『資治通鑑』笱記（二）

福 島 正

大阪教育大學教養學科社會文化講座

北宋的司馬光編纂的一部編年體通史『資治通鑑』是中國史學史上的重要典籍之一，有關『資治通鑑』的研究論考達到龐大的數量。然而迄今的研究論考大多是着重介紹了編纂方法和解明分工問題的，但是對於司馬光是怎樣選擇或者改寫史料而編纂『資治通鑑』的問題，詳細的研究論考却很少。這幾年來，我本着這樣的觀點重新閱讀了『資治通鑑』，并參閱了日本江戸時代尾張藩儒學者石川安貞編纂的『資治通鑑證補』等書。本稿是這些備忘錄的一部分。本稿主要取『資治通鑑』的第九卷到第二十二卷的部分進行論究。第九卷到第二十二卷的部分，從歷史時期上來看，相當於前漢的高祖到武帝時期。

**關 鍵 語：** 中國史學史，司馬光，『資治通鑑』

**Key Words：** history of Chinese historical studies, Ssu-ma Kuang, “Comprehensive Mirror for Aid in Government”